

釧路市教育委員会 令和6年第9回4月定例会会議録

1 日時：令和6年4月16日（火）13時30分から15時00分まで

2 会場：釧路フィッシャーマンズワーフMOO 2階 教育委員会室

3 出席者

岡部義孝教育長

（教育委員）

山口隆委員、小出美貴子委員、大山稔彦委員

（事務局）

齋藤学校教育部長、工藤生涯学習部長、本川教育指導参事、森学校教育部次長、大島総務課長、西崎施設計画主幹、齊藤総括指導主事、佐藤青少年育成センター所長、小西教育政策主幹、渡部給食担当主幹、及川北陽高校事務長、澤口生涯学習部次長、曽根美術館長、秋葉博物館長、竹内スポーツ課長、石川学芸主幹、鈴木動物園長、平野ふれあい主幹、北村阿寒生涯学習課長、長谷地音別生涯学習課長、吉岡指導主事

4 議事録署名人 山口委員 大山委員

5 傍聴人数 0人

6 提出案件

【公開案件】

報告事項

- （1）令和6年度小中学校児童生徒数等の状況
- （2）令和6年度北陽高等学校入学生等の状況について
- （3）令和6年度釧路市における学校教育指導について
- （4）令和5年度英語に関するアンケート（2回目）の結果について
- （5）令和5年度算数・数学に関するアンケート（2回目）の結果について
- （6）釧路市コミュニティ・スクールの導入について
- （7）令和6年度釧路市奨学生の決定について
- （8）北陽高等学校における台湾景文高級中学訪問団の来校日程の再調整について
- （9）釧路新書第35巻の発刊について
- （10）ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館等について
- （11）令和6年度市立美術館事業について

7 会議内容

【公開案件】報告事項

(1) 令和6年度小中学校児童生徒数等の状況

(森学校教育部次長)

報告事項1、令和6年度小中学校児童生徒数等の状況について報告する。

今年度の新入学児童生徒の状況については、小学校1年生は前年より151名少ない795名となっている。また、中学校1年生は、前年の1,109名より25名少ない1,084名となっている。このほか、附属釧路義務教育学校 前期課程の1年生は41名、後期課程の1年生(7年生)は74名となっている。

次に、市立小中学校全体の児童生徒数の動向については、すべての学年において減少している。小学生の合計人数は、前年度より386名減の5,748名、中学生の合計人数は、前年度より51名減の3,297名となっている。特別支援学級在籍児童生徒については、小学校では前年より10名減の607名、中学校では前年より35名多い258名となっている。なお、今回の集計は4月1日現在のものであり、今後、学校基本調査等で使用される、5月1日を基準とした報告値においては、若干の増減が生じることが見込まれる。参考として、市立小中学校における児童生徒数の10年間の推移をまとめた表を配布している。特別支援学級の児童生徒数は10年前と比較すると、小学校・中学校ともに約2倍と増加している。児童生徒数の合計については、平成27年度と令和6年度を比較すると、小学校では、2,187人減で、約27%の減少、中学校では788人の減で、約20%減少している。

◎この説明について、各委員から次のとおり発言あり

(大山委員)

全体的に減っているものの、特別支援学級に在籍する児童生徒の割合は高くなっているというように表を見て感じたが、今後もやはり特別支援学級の指導をどのように行っていくかが重要であり、特に中学校においては、これからも大きな課題となってくるため、その点を中心に進めてほしいと思っている。

【公開案件】報告事項

(2) 令和6年度北陽高等学校入学生等の状況について

(及川北陽高校事務長)

報告事項2、令和6年度北陽高等学校入学生等の状況について報告する。

はじめに、令和6年度の新入学生数は、定員の200名となっており、そのうち40名が

推薦の合格者となっている。また、新入学生を含めた4月16日現在の在校生数は、589名となっている。

続いて、令和5年度の卒業生の進路状況である。進学については、希望者125名に対し124名が決定し、決定率は99.2%となっている。就職については、希望者51名に対し50名が決定し、決定率は98%となっている。なお、進学決定者の学校別内訳及び就職決定者の就職先の地域区分は、資料に記載のとおりとなっている。

◎この説明について、各委員から次のとおり発言あり

(山口委員)

定員は去年も一昨年も200名ということで、2年生と3年生が200名に満たない人数だが、この内訳を教えてください。

(及川北陽高校事務長)

まず現在の3年生は、4月1日時点で前年度からの原級留置ということで1名加えて201名が入学時のスタートとなったが、そこから転学による8名の減、転入による1名の増となり現在の194名となっている。現在の2年生は定員割れにより、199名が入学時のスタートとなり、そこから転学、退学等で4名の減となり、現在の195名となっている。

(小出委員)

資料の中で、就職内訳は市内管内、道内、道外という区分がされているが、進学内訳はどのように区分されているか教えてもらえるか。

(及川北陽高校事務長)

卒業生の進学内訳で市内管内、道内、道外の内訳だが、まず市内管内が39名、道内が75名、道外が10名ということで合計124名となっている。それから卒業生、この3年次176名だったが、入学時の人数は186名ということで、定員割れで14名少なかった、それが3年経過するうちに10名転学等で退学をして176名の結果となっている。

(岡部教育長)

口頭の説明では限界があるため、進学内訳も、市外等の項目ごとに分けるようにしたら良いと思う。進学も就職も希望せず、決定もしていない生徒の動向はわかるか。

(及川北陽高校事務長)

2名未定の生徒がおり、引き続きフォローは行っているが、現在も未定である。

【公開案件】報告事項

(3) 令和6年度釧路市における学校教育指導について

(齊藤総括指導主事)

報告事項3、令和6年度釧路市における学校教育指導について報告する。

学校教育指導は、私たち指導主事の本来業務として位置付けられており、市立学校を訪問

し、教育課程や学習指導、生徒指導、その他の学校教育に関する専門的事項について指導・助言を行う大切な機会である。今年度も、昨年同様、北海道教育委員会が行う学校教育指導の実施要項のとおり、年に2回以上の学校訪問を行う予定である。特に今年度の計画訪問1回目については、令和5年度に「釧路市が目指す授業の姿」を示したことから、教員全体の意識向上や授業改善の成果、進捗状況などを的確に把握するとともに、釧路市の課題である「学力向上の取組み」「不登校児童生徒への対応」「特別支援教育の充実」「校務支援システムを含むICTの活用」など、複数の観点において、協議を進めていく。

一次訪問終了後、概ね8月以降は計画訪問2回目（二次訪問）において、一次訪問の時と比較し、どのような変化があったのか、検証改善サイクルが効果的に働いているかなどを確認するとともに、特設授業において、1人の先生の授業1時間通して授業を参観し、全教員を対象に、授業を行った先生の授業を通して、指導助言を行い、全教員が「釧路市が目指す授業」について具体的なイメージを持つことができるよう授業改善を進める方法について指導を行う。

この期間は、各学校の要請に応じて指導主事を派遣する期間でもあり、2回の計画訪問以外にも、学校のニーズに応じて指導主事を派遣し、指導助言を行い、教員の資質向上を図る。

さらに市教委では、通常行う2回の学校教育指導のほかにも、以前示したように、全国学力・学習状況調査や釧路市標準学力検査等の調査結果から、課題となった学校に対して、複数回の学校教育指導を行い、授業改善や学力向上の取組み状況を確認するほか、具体的な指導助言に努めてまいりたいと考えている。

複数回実施する学校教育指導を通して、学校の現状を的確に把握し、解決に向けた具体的な方策について、示していきたいと考えている。

◎この説明について、各委員から次のとおり発言あり

（岡部教育長）

昨年までと比べてどこがどう違うのか、明確にわかるものはあるか。

（齊藤総括指導主事）

基本的なスタイルについては大きく変更はない。ただし、一次訪問において、学校改善協議シートというこちらで示すものがあり、それを提出して行うということは去年から変更しており、今年度の教育行政方針にあわせた形で文言を修正し検証改善サイクルを確認していきたいと思う。

（山口委員）

こういった考え方で計画訪問をしたいという内容を、局と事前協議ができれば、それに合わせた適切なアドバイスをもらうことができ、より効果的かと思うが、いかがか。

（齊藤総括指導主事）

局とは事前に打合せをしており、一次訪問、二次訪問、どちらも市教委が主導して実施するということで確認はしている。

(山口委員)

市教委主導で実施できるのであれば、その方が良いと思う。

(大山委員)

計画訪問1回目、2回目、市独自訪問において市教委として参加するのは誰になるのか。
例えば計画訪問の1回目は、指導主事が1人で行くのか。

(齊藤総括指導主事)

計画訪問1回目については参事、総括、それぞれがチームになり、複数の指導主事で訪問する。

(大山委員)

ということは、参事か総括と市の指導主事と、それに局の指導者がついてくるという形か。
計画訪問1回目、2回目、市独自訪問もその形となるのか。

(齊藤総括指導主事)

2回目については、授業中心となるため、できる限り1回目に行った指導主事が2回目も行くという形になると思う。

(大山委員)

指導主事だけで行ってしまうと、校長先生に厳しく指導することが困難なこともあり得ることから、参事か総括が参加し、校長先生に対して指導・助言をしてきたほうが良いと思う。

【公開案件】報告事項

(4) 令和5年度英語に関するアンケート（2回目）の結果について

(吉岡指導主事)

報告事項4、令和5年度英語に関するアンケート（2回目）の結果について報告する。

本アンケートは、令和6年1月に、市内小学校、義務教育学校の5年生から、北陽高校2年生までを対象に、オンラインで実施した。

全学校種共通の気持ちに関する項目である「英語の勉強は好き」「英語の授業は楽しい」「英語の授業で英語を積極的に使っている」「英語を使って、いろいろな人とコミュニケーションをしたい」においては、学年が上がるにつれて肯定的な回答が減少し、否定的な回答が増加する傾向があり、中学校3年生でやや改善する傾向が共通して見られる。

続いて、技能に関する項目のうち「話すこと」における「友達と英語で問答するなどのやり取りを行うこと」の特徴として、小学校6年生をピークとし、中学校3年生にかけて、学年が上がるにつれて、苦手だと感じる割合が増加する傾向が見られる。

中学校と高校の項目ではあるが、「読むこと」及び「書くこと」の質問においては、中学校2年生から3年生、高校1年生から2年生にかけて、改善する傾向も見られる。

これらの結果から、学年が上がるにつれて肯定的な回答割合が減少する要因は、小学校4年生と小学校5年生との間、または小学校6年生と中学校1年生との間に、外国語活動や小学校外国語科で指導方法や学習内容との差を感じる児童生徒がいることが考えられる。

続いて、10ページにある、本アンケートの1回目と2回目の結果を比較したものを示しているが、比較結果の分析については、平木外国語教育アドバイザー作成資料により説明する。

まず、本アンケートの分析にあたり、「校種間接続」を意識した授業改善を考える上で、特に「英語の授業は楽しい」「授業では、積極的に英語を使っている」「英語を使って、いろいろな人とコミュニケーションをしたい」の3つの項目に注目した。理由としては、これらの項目において表れる児童生徒の声は、「教師の授業づくり」が大きく影響していると考えられるからである。

13ページのグラフについて、こちらは注目した3つの項目について、小学校5年生を除き、6年生から高校2年生までの肯定的な回答の割合の推移を示したものである。特徴としては、いずれの項目についても、中学校1年生のスタート時が頂点となり、中学校1年生から2年生にかけて、徐々に下降する傾向が見られる。一方で、中学校3年生の1年間の中で少し改善していることがわかる。

続いて、14ページのグラフについて、こちらは令和5年度内における5月の結果と1月の結果を各項目別に示したものである。青色が5月、オレンジ色が1月となっており、共通して見られる特徴としては、緑色の楕円で示したように、中学校1年生の1年間の中で下降傾向が顕著に見られる。一方、紫色の楕円で示したように、中学校3年生の1年間の中では上昇傾向が見られる。

15ページのグラフについて、こちらは中学校を中心に「英語の授業は楽しい」の項目について、令和4年度と令和5年度の結果を示したものである。令和4年度においても、中学校1年生の1年間の中で下降傾向が見られたが、緑の矢印で示しているように、令和5年度は、前年度と比べて、下降幅がほぼ半分になっている。また、令和5年度の中学校2年生の1月から中学校3年生にかけてはやや上昇傾向も見られる。

16ページのグラフについて、同様に「いろいろな人とコミュニケーションしたい」の項目について示したものである。こちらの項目に関しても、令和4年度と比較して、中学校1年生や中学校2年生における減少幅の縮小、または中学校3年生における上昇幅の増加が見られる。

最後に、次のページの外国語教育アドバイザーとしての第3期概要についてであるが、これらの結果につながった一因として、小学校からの接続を意識した授業づくりの推進が考えられることから、平木外国語教育アドバイザーを中心に進めている外国語巡回指導において、右下に示してあるように、今年度の重点として、各中学校区において、授業参観や交流を通して、学校どうし・教師どうしが「主体的・対話的」に協議・交流を進め、児童生徒のため、授業づくりのためを意識した「深い」連携となるよう進めてまいりたいと考えている。

また、小学校6年生から中学校1年生の円滑な接続につなげる視点から、1学期の中学校の公開授業においては1年生、3学期の小学校では6年生での公開を基本とし、小学校卒業時の姿と中学校入学後の姿を意識した授業づくりを進めてまいりたいと考えている。

◎この説明について、各委員から次のとおり発言あり

(山口委員)

2年生から3年生に上昇傾向が見られるというのは、平木外国語教育アドバイザーが定期的に巡回し、英語の授業をコミュニケーションを中心とした授業に改善したほうが良いということで継続的にやってきた成果が出てるということで良いか。

また、小中ジョイントの観点からも、小中学校双方が互いの英語の授業を見に行っていることが全市的にしっかり進められているという認識で良いか。

(吉岡指導主事)

まず、一点目の中学校2年生から3年生の上昇について、平木外国語教育アドバイザーが常日頃指導しているコミュニケーションをベースとした授業改善ということで、着実に授業自体が変わっているという割合は多くなっていると思う。中1、中2段階では定着していないものが、3年生になってようやく自信を持ってできるという姿が見られるようになっていられると思われる。

2点目の小中学校における交流授業ということだが、どの校区においても、小中学校が集まって一緒に授業を見合い、合同で協議を行うということを基本としている。ただ、授業の関係で参加できないという状況もあることから、その際にはクラスルームを活用し、交流するというを全市的に行っている。

(大山委員)

小学校6年生から中学校1年生に順調に移行していることを感じる。小中ジョイントについても協力する学校が多くなってきているということで今後とも進めていただきたい。

北陽高校は、平木外国語教育アドバイザーの指導をどのように受けている状況であるか。

(吉岡指導主事)

北陽高校については、昨年も5月に英語科の先生を集めて、最初に講話を聞いてもらい、その趣旨を理解していただいた上で巡回訪問にあたっているという状況である。

課題としては、小中学校の授業を、北陽高校の先生に見てもらいたいが実現できていないところがあるため、校長先生、教頭先生にも働きかけながら、今年度は実現していきたいと考えている。

(大山委員)

北陽高校の良い点として台湾への訪問など外国語活動があるが、北陽高校に入学すれば語学力が高くなるよう取組みを推進していただきたい。

(岡部教育長)

北陽高校には専属のALTも配置している。ALTが有効に機能しているのかどうかという視点も含めて、令和6年度はしっかり取り組んでほしいと思う。

(小出委員)

授業は楽しいという項目でも、肯定的な回答が多く、授業改善が進んでいるように感じているが、中学校に入ると受験が視野に入ってきて、授業改善が行われていく中で、受験に対

する勉強と授業の兼ね合いが気になる。まとまった文章を読んで理解できるなど技能のところが楽しいという点と比較すると肯定的な意見の割合が少し減ってくるのがグラフから見受けられるが、何か分かることがあれば教えてもらえれば思う。

(吉岡指導主事)

私も一緒に外国語の授業をまわっていて、現場の先生方からも受験が気になるという声を聞くことがあるが、いつも申し上げているのは、受験問題自体の求められている力が変わってきているということを伝えている。先生方の中には旧態依然の知識偏重の受験というものをまだイメージされている方がいるのも現状である。そのため、授業の中で求められる力を伸ばしていくために、今、コミュニケーションベースの言語活動中心の授業を展開するように説明しているところではあり、そういった言語活動が充実されることにより、子どもたちが言語活動の中で力をつけてきたということを実感できるように進めていきたいと感じている。

【公開案件】報告事項

(5) 令和5年度算数・数学に関するアンケート(2回目)の結果について

(齊藤総括指導主事)

報告事項5、令和5年度算数・数学に関するアンケート(2回目)の結果について報告する。

本アンケートは、令和6年2月に、小学校3年生以上の全児童生徒と、これら児童生徒に算数・数学を指導している全教員を対象に実施したものであり、今回の調査で2回目の実施となる。調査回答者数は、児童生徒6,465名、教員243名となった。

2回目の実施となった本アンケートの目的としては、児童生徒に対する同一質問の結果を比較することで、成果と課題の整理を行うとともに、次年度に向けた授業改善の方向性のエビデンスとして活用することである。今回は、1回目と2回目の比較において、特筆すべき傾向を中心に説明する。

概要版資料「特筆すべき事項の比較結果」について、中学1年生において、設問(1)、(2)、(3)、(5)、(7)、(8)の5つにおいて、1回目よりも肯定的な回答をした生徒が減少している。特に(1)「数学の勉強は好き」という設問に対して、肯定的な回答をしている割合は、7月時点で72.9%であるのに対し、2月実施のアンケートでは、56.1%となり、比較すると16.8%も減少している。加えて、設問(7)「4月からの数学の授業の内容はよく分かりますか」という設問では、肯定的な回答割合が5月時点で91.6%であるのに対し、2月時点では74.3%と減少し、こちらも17.3%も肯定的な回答割合が減少していることから、「数学への関心・意欲」、「授業内容を理解する」という両面において、肯定的な回答割合が減少するといった実態が明らかとなっており、このことは釧路市において、非常に大きな課題であると捉えている。他の小学校3年生から6年生の算数、中学2年生と3年生の数学においても、肯定的な割合の減少等は一定程度見られるものの、10%以上大

きく減少しているのが中学１年生のみであり、いわゆる「数学嫌い」といった状況が生じていることが判明した。

この結果を踏まえて、特に中学校１年生の授業改善に焦点化し、取組みを進めて参りたいと考えている。具体的には、中学校１年生の全単元において「短編授業づくり動画」を作成し配信するほか、１年生の担当指導教諭が互いに情報共有できるクラスルームを設定し、授業改善を充実させるための環境を整備する。加えて、指導主事による示範授業を通して、授業改善の具体的なイメージが持てるよう指導助言をしていく。

教員のアンケートでは、概要版資料にあるように、採用１年目から５年目の教員で「話し合い」の深め方と「振り返り」を位置付けた「まとめ」について、採用６年目から１０年目については、「課題」の明確化、「話し合い」の質的向上、「ＩＣＴの活用」について課題意識が高まる傾向が見られた。

これらは、令和５年度からはじめた「釧路市が目指す授業」を意識しながら授業改善を行った結果として、明らかとなり個々の教員が自覚した課題であると捉えられることから、今後も教員が課題と感じている項目に特化した指導助言や解決に向けた方策を提案してまいりたいと考えている。

今回の５月と１２月の２回にわたって変化をみるアンケートを実施したことにより、児童生徒の学習状況や意識の変化、教員の課題意識の実態と変化についてエビデンスを得ることができた。今後は、これらの課題解決に向けた実効性ある取り組みを着実に進めていくことが重要であり、先ほどお示しした改善策を実行してまいりたいと考えている。

◎この説明について、各委員からの次のとおり発言あり

（山口委員）

先ほどの説明の中で、中学校１年生の落ち込みが顕著だと説明があった。以前、ある学校の校長先生と話したときに、小学校６年生の段階で、おおむね小学校６年生の算数を理解できているという子どもが例えば３０人いたとするが、中学校に行ったら中学校１年生の数学のテストでおおむね理解できる子が、そのうちの２０人で、１０人は点数が取れなくなってしまう。どうして小学校６年生の段階でおおむね理解できていたものが、中学校１年生のときに落ち込んでしまうのか。この点を小学校と中学校の先生同士が、一人一人の子どもにターゲットを絞って、小学校のときにはこういった取組みを行っていたことにより理解ができていたが、中学校ではその辺が欠落していないかどうかをケース研究として交流し合う必要があるのではないかなと思う。そういった小中ジョイントの具体的な形としてあっても良いという気がするかどうか。

（齊藤総括指導主事）

小中ジョイントが基本になると思う。今年度本格稼働している校務支援システムは釧路市標準学力検査の結果も中学校にしっかり引き継げるという利点もあることから、そういった客観的な資料等を基にしながら、その個々の児童生徒の状況をしっかり比較し、授業改善を

どのように行っていくかという観点で、議論を深めていくことは重要であると捉えている。
(本川教育指導参事)

個人的な見解が入るが、国語は国語、先ほどの英語は、小学校3～4年生は外国語活動、小学校5～6年生及び中学校では英語となり、算数・数学は小学校6年生までは算数で、中学校からは数学という別教科になると考えなくてはならないと思う。算数と数学の違いについては、算数は四則計算が中心の具体的な数値や身の回りの事象をもとにして、思考の中から計算式を求めるという授業が多くなっていくが、数学はより抽象的な概念に入っていく学問になってくるため、文字がたくさん出てきて、中学校1年生の初期の段階では、数学をやっているのか英語をやっているのかわからないというような、そういった生徒が一気に増え、釧路市だけの課題ではないが、数学における中一ギャップの原因の一つとも捉えられている。そのため、今の小中ジョイントで小学校の先生と中学校の数学の先生の単なる交流ではなく、授業の進め方や、解決法もより深めて小学校の良いところをスムーズに続けられるよう、授業改善レベルの小中ジョイントを算数・数学科ではより一層今年度進めていきたいと考えている。

(大山委員)

算数と数学の違いは当然あるが、小学校の先生が今教えていることが、中学校に行ったらどう変わるのかということを理解する必要がある、中学校は小学校でどう学んできたかという意識を高めなければならない。半径×半径×3.14が πr^2 の2乗にどうしてなるのかというそのギャップを埋めない限り、小学校で勉強ができて、中学校ではついていくことができないということが起きてしまうので、今の話をぜひ進めてほしい。二つ目は課題解決の方向性について書いてあるが、動画の活用を促したり、働きかけをすることは過去にも行っていることである。釧路市の教育すら読んでいない先生がいるとなると、校長先生にしっかりと指導しなければならないので、具体的に教育委員会として先ほどの話を方策としてぜひ入れていただきたいと思う。最後に指導主事による示範授業というのは今回メインであるので、ぜひその授業を公開しながら、中学校の先生方の意識を変えてほしいと思っている。

(山口委員)

今、大山委員から、釧路市の教育すら読んでいない先生がいるという話を伺ったが、昨年とても良いものを作ったので、指導主事の計画訪問等のときに、この釧路市の教育を具体的に使いながら、指導助言をする場面をぜひ作ってほしいとお願いした記憶があるが、釧路市の教育の令和5年度分の利活用について、実態はどうだったか。

(齊藤総括指導主事)

釧路市の教育の活用状況について、日常的に活用していると回答したのは13%。ときどき活用しているが52%。年に2～3回程度の活用が28%。年に0～1回程度の活用が7%となっている。年に0～3回というのがあわせると35%なので、ここが大きな問題だと捉えている。

あわせて、釧路市の教育を活用した授業改善等については、指導助言の際に必ず使用するなどの工夫を行っていかなければならないと考えているので、今後進めていきたいと思う。

(大山委員)

それは全員から回収しているのか。

(齊藤総括指導主事)

市内全603名の先生分である。

(大山委員)

学校ごとの利用状況はわかるか。

(齊藤総括指導主事)

生データではないので今はわからないが、抽出すればわかると思う。

(山口委員)

校長先生の利活用していかなければならないという意識は、以前よりも高まっているという認識で良いか。

(岡部教育長)

603人を学校ごとに並べてみたらよくわかるのではないか。

どこの学校が使われていて、どこの学校は使われてないというのを調べてみたい。

(山口委員)

あれだけ素晴らしいものを作っていて、それが有効に利用されてないというのは、もったいないので、ぜひ利用してもらえるような取組みをお願いしたいと思う。

(齊藤総括指導主事)

アイフューチャーが入ったため、個別にデータを取ることが可能となっているため、今までは釧路市の教育など、色々なデータを管理職に渡して、そこで活用をお願いする周知方法だったが、管理職がそこで止めてしまうというケースも考えられることから、全教員が見られるようにする工夫が必要だと考えており、誰に情報を渡すのか、誰に見てもらいたいのかということをしっかり明確にして活用していきたいと思う。

(小出委員)

11ページ、12ページの先生たちにアンケートをとった結果について、特別支援学級で授業をしている先生方も何人か悩みを抱えており、私たちも中学校等の授業を見に行ったときに思ったことだが、特別支援学級での授業の在り方や先生に対するフォローも大事なことでないかと思うので、その視点も忘れずに取組んでいただければと思う。

(齊藤総括指導主事)

特に特別支援については、個々に応じた指導が本当に大事になってくることから、様々な研修プログラムなども勉強しながら、しっかり進めていきたいと思っている。

(大山委員)

アンケートの評価のとり方だが、各学校で集計することができるのではないかと思う。過去に1番困ったことは、評価がしっかりとされておらず、何が課題なのかが分からなくなったことがあり、今回の推進計画は評価をしっかりとすることで作っている推進計画なので、今回も1回目の結果が出ているが、前の年よりも下がっている項目があり、この項目は下がってはならない。どこの学校が下がっているのかということも含めて指導していかない限り、

5年後にも同じく上がったり下がったりしてしまうので、その点も工夫しながらやっていただければと思っている。

【公開案件】報告事項

(6) 釧路市コミュニティ・スクールの導入について

(森学校教育部次長)

報告事項6、釧路市コミュニティ・スクールの導入について報告する。

令和6年度4月1日から、新たに小学校1校と中学校3校でコミュニティ・スクールが導入され、これにより市内全域の導入校数と導入率は、小学校が20校で76.9%、中学校が11校で73.3%となった。未導入校のうち小学校3校、中学校1校において令和7年度の導入に向けた推進委員会が継続されており、今年度も新たに小学校3校で推進委員会の設置が予定されている。調査研究期間内においては、「目指す子供像」の設定と実現に向けて、地域住民や保護者、教職員等で構成されるコミュニティ・スクール推進委員会により、協議を重ね、学校運営に地域の声を生かし、特色ある学校づくりを進めていくことを目指している。

今後のコミュニティ・スクールの導入については、これまでの取組みにおいて学校と家庭、地域との連携や小中学校間の連携の強化が図られたことなどを踏まえ第3期教育推進基本計画の最終年度となる令和9年度には、全ての学校への導入を目標としており、今後もコミュニティ・スクールを中心に、地域学校協働活動を推進してまいりたいと考えている。

◎この説明について、各委員からの次のとおり発言あり

(岡部教育長)

学校ごとのコミュニティ・スクールの活動状況について、導入が進む一方で、実際に何をやっているのかというところに課題が残る話も多く聞くため、全校を目指していくことはもちろんだが、どこかで資料として出してもらえれば、この教育委員会でも議論したいと思う。

(山口委員)

コミュニティ・スクールの導入について状況は分かったが、そのコミュニティ・スクールが本当に機能してるのかどうかは、地域学校協働活動推進員の存在があるかというのが重要なキーワードになっているような気がする。推進員の配置状況、今後の配置の見通しについてはどのような認識でいるか。

(森学校教育部次長)

現在は11名が推進員だったと把握しているが、コミュニティ・スクールが導入されるところには必要な人材であると思っている。まだ発展途上で、すでにコミュニティ・スクールが導入されているところにもすべて配置されているわけではないが、そういった人材確保も必要になってくると思う。

(山口委員)

配置されているのは全て小学校かと思うが、小中ジョイントが推進されている中で、小学校に配置されている推進員が中学校との関連で、どのような働きを期待できるかということも視点の一つとして考えていくべきではないかという気がしている。ぜひ検討していただければと思う。

【公開案件】報告事項

(7) 令和6年度釧路市奨学生の決定について

(森学校教育部次長)

報告事項7、令和6年度釧路市奨学生の決定について報告する。

釧路市奨学金貸与制度は、昭和29年に始まり、令和5年度までに延べ3,309名に奨学金を貸与している。

最初に令和6年度奨学生の募集人数及び応募状況である。なお、貸付の財源の違いから、釧路・音別地区と阿寒地区の2つの地区に分けて報告する。

資料1. 高等学校、募集人数について、釧路・音別地区5名、阿寒地区4名、計9名に対し、釧路・音別地区で1名の応募があった。なお、カッコ内の調整後の数字については、後ほど説明する。

次に、2. 高等専門学校については、募集人数が釧路・音別地区2名、阿寒地区2名、合計4名に対し、釧路・音別地区で1名の応募があった。

3. 専修学校・大学、こちらは短大・大学院を含むが、こちらについては、募集人数が釧路・音別地区35名、阿寒地区6名、合計41名に対し、釧路・音別地区で専修学校8名、大学43名の計51名の応募があった。

いずれの区分においても、阿寒地区は応募はなかった。

4. 釧路市全体としては、募集人数54名に対し、53名の応募となっている。

次に、選考についてだが、去る3月25日に開催された釧路市奨学審議会において、家計の状況・身体・学業・人物等から総合的な審議を行い、奨学生を選考した。

選考にあたっては、より多くの応募者へ貸与できるよう、審議会の下承を得た上で、応募人数が募集人数に満たない区分の採用枠を、予算の範囲内で別の区分に振り替える調整を行った。なお、阿寒地区については前田一步園財団様からの寄附が原資であり、他の地区への振り替えができないというのが昨年度までのルールであったが、今回より寄附者にご了承いただき、他の地区への振り替えが可能となっている。そのため、1の高等学校区分のうち、釧路・音別地区の4名分および阿寒地区の4名分、2の高等専門学校区分のうち、釧路・音別地区の1名分および阿寒地区の2名分を、3の専修学校・大学区分の釧路・音別地区に振り替えした。その結果、専修学校・大学区分の釧路・音別地区の枠は、当初の35名から10名増えて45名となった。

続いて、審議会での選考の状況を報告する。学業基準について、3年間の評定平均が3.

0以上という選考基準に満たない方が2名いた。うち高等学校区分の1名は特別審査を行い選考対象としたが、応募の多かった専修学校・大学区分の1名は対象から外しての審議となった。奨学審議会における審議および答申に基づく採用決定者は、高等学校1名、高等専門学校1名、専修学校・大学45名となった。全体としては、応募者53名のうち、47名が決定となったところである。

◎この説明について、各委員からの次のとおり発言あり

(山口委員)

以前から、阿寒の前田一步園財団の財源を希望者がいないときにはこちらのほうに転用させてもらえないのかということを出題としていて、この定例教でも出ていたが、前田一步園財団の理解を得て、今年度からこういう形になったというのは非常に良い状況ではないかと思う。

【公開案件】報告事項

(8) 北陽高等学校における台湾景文高級中学訪問団の来校日程の再調整について

(及川北陽高校事務長)

報告事項8、北陽高等学校における台湾景文高級中学訪問団の来校日程の再調整について報告する。

はじめに、来校に至る経過である。昨年、令和5年11月に実現した北陽高校の台湾見学旅行において訪問し、学校交流を行った台北市の景文高級中学から、訪問の実施後に、令和6年5月に日本への教育旅行を実施し、北陽高校に来校したい旨の意向が示されていた。そして、本年2月になり、同校の訪問団、生徒24名から28名で構成する訪問団の来校が5月22日になると決定したことから、これまで北陽高校では、訪問団受入に向けて準備を整えていたところである。

次に、訪問団の受入再調整についてだが、先般4月8日に同校より、来校を中止する旨の連絡を受けた。この理由は、4月3日に発生した台湾東部沖地震の影響により、親元を離れて外国旅行をすることへの不安や、授業時数の確保など勉強への影響を心配などがあり、複数の保護者から、今回の訪日旅行のキャンセルの申し出が寄せられたということで、旅行自体を中止する判断に至ったとのことであり、来校については、今後再調整を図ることとなった。

資料3の当初予定に記載のとおり、訪問団の来校の際には、朝9時から13時まで、生徒が本校との学校交流に参加し、歓迎セレモニーや、武道体験・日本料理・和 문화体験・スケート体験、こういった4コースによる生徒交流を行う予定としていたところである。

今後の対応については、同校から、本年9月から始まる秋学期の中で、改めて訪問計画を調整したいとの申し出をいただいている。

北陽高校としても、本年１１月に２回目の実施となる台湾見学旅行に向けて、昨年同様に、同校との間で事前のオンライン交流・当日の学校交流を進めるとともに、釧路での同校訪問団の受入れについても緊密な連絡を取り、再度、受入れメニューの提案など、準備を進めてまいりたいと考えている。

◎この説明について、各委員からの次のとおり発言あり

(山口委員)

台湾との交流については、北陽高校だけではなく、台湾台北動物園との交流も含めて、釧路市全体として台湾にはお世話になっており、様々な交流が盛り上がっているところであるが、９月にもし来られたときには、北陽高校だけではなく、釧路市全体としての応援メッセージや何か品物などを届けられるような取組みも考えて良いのではと思うがいかがか。

(齋藤学校教育部長)

手厚くもてなすということについては、この秋の受け入れのときに全庁に声掛けをして、いろいろなお土産の検討など、受け入れの事業の検討というところの協力を常に求めているので、それは市役所全体として取り組んでいこうと思っている。寄附金等については、先日市議会から寄附金を渡したという報道されたところであるが、市役所としても各種ふるさと納税等を使いながら何かできないかということを経済政策部の方で検討をしている。

(岡部教育長)

景文高級中学の来釧の際には、既に日台親善協会にも、情報を事前に共有する中で、どういった催しをしてお迎えをしようかという検討も頂いていたところであり、今後は山口委員が発言したような、より広い市民レベルで交流を後押ししていけるような検討を行っていくよう、担当課にはその旨お伝えしたいと思う。

【公開案件】報告事項

(９) 釧路新書第３５巻の発刊について

(澤口生涯学習部次長)

報告事項９、釧路新書第３５巻の発刊について報告する。

釧路新書・叢書については、これまで様々なジャンルを取り上げ、釧路市の郷土研究の解説書として長く愛されてきている。これまでに釧路新書３４巻、釧路叢書４１巻を発刊しており、このたび新書第３５巻となる「伝えたい『蔵』の記憶」を発刊した。釧路観光ガイドの会の木村浩章（きむら ひろあき）氏が蔵の保存活動を契機に２０１２年から釧路新聞紙面に連載しているコラム「伝えたい『蔵』の記憶」より、４６０回を超える連載記事の中から、テーマごとに読者にとって思い出深い内容と思われる選りすぐりのものを集め纏めた書籍となっている。

内容については、道東中核都市の礎となった「南大通近辺」や南大通と北大通を結ぶ起点

である「幣舞橋」の誕生から現在までの経緯、市民に愛された「北大通近辺」の懐かしい大型店や商業施設など、釧路の躍進を支えた人々の活動や生活の記録を、写真や当時の出来事とともに記憶としてまとめ上げたものとなっている。時代とともに移り変わる街並みの記憶を後世へと伝える資料として、また当時の懐かしい記憶を呼び起こし思い出話に花を添えるきっかけとして活用いただける1冊である。

4月19日より、1冊税込み1,100円で市内書店や釧路市中央図書館等で販売を開始する予定である。

◎この報告について、各委員からの発言はなし

【公開案件】報告事項

(10) ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館等について

(11) 令和6年度市立美術館事業について

(澤口生涯学習部次長)

報告事項10、ゴールデンウィーク中の生涯学習施設の開館等について及び報告事項11、令和6年度市立美術館事業について報告する。

4月27日から5月6日までの各施設の開館状況においては、資料のとおりであるが、期間中、美術館、こども遊学館、ウインドヒルくしろスーパーアリーナ、動物園、丹頂鶴自然公園などでは、休まずに開館する。

ゴールデンウィーク期間中の主な行事として、釧路市立美術館では、今年度予定している特別展3本のうち、1本目の「コレクションが出会う道東(ばしょ)」を開催する。4月27日から鹿追町にある神田日勝記念美術館のコレクションと当館のコレクションを合わせて展示するものである。また、この特別展の期間中の4月28日と29日の2日間は、子ども向けのイベント「ペキタ工作広場」を開催する。

こども遊学館では4月27日から5月6日まで「ゴールデンウィークイベント木のおもちやであそぼう!」を開催するほか、期間中の小中学生の展示室観覧料が無料となります。中央図書館では、「春のお話し会」や「祝日上映会」、ウインドヒルくしろスーパーアリーナでは、5月4日から6日まで未就学児が多目的室に設置された遊具等を利用して無料で遊べる「こどもアリーナ」を開催する。

博物館では、体験や工作を通じて楽しく学べる「博物館で遊ぼう」を5月3日から6日まで、北斗遺跡展示館では「竪穴住居で屋根ふき体験」を5月5日に開催する。また、博物館1階マンモスホールでは企画展「釧路の神社を巡って～人々との身近な結びつき～」を、常設展示室1階ではミニ展示「昆虫 50 倍拡大模型～つくりものや 吉田ひでおの特殊造形～」を開催中である。なお、5月5日の子どもの日は、市内の小中学生の入館料が無料となる。

動物園では、4月27日から5月6日まで、春の動物園まつりを開催する。このうち、4

月29日には、小学生を対象に「ヒツジの毛刈り体験」を実施したり、5月6日には、動物にちなんだ絵本の読み聞かせや、モルモットのふれあい体験などを行う。

続いて、市立美術館事業についてである。今年度は、今説明したゴールデンウィーク期間中の行事の中で報告した、特別展5「コレクションが会う道東（ばしょ）」を皮切りに全部で6本の展覧会の開催を予定している。パンフレットの中では赤色の見出しとなっている展覧会の特別展について説明すると、2本目は「奇跡のシールアート 大村雪乃の世界展」。文房具にある、丸いシールを使って主に夜景を制作する大村雪乃氏の展覧会となっている。6月29日から8月18日まで開催する。

続いて特別展の3本目は「原田治 「かわいい」の発見」は、「オサムグッズ」の生みの親であり、世代を超えて愛されるキャラクターを描くイラストレーター・原田治氏の展覧会であり、8月31日から10月27日まで開催する。

また、ミニ企画展及びコレクション展の開催するほか、美術館で開催する事業としては、「道展・釧路移動展」や「釧路郷土作家展」、阿寒・音別地区への巡回展などが予定されている。優れた作品を地元で鑑賞できる機会として、多くの皆さまのご来館をお待ちしている。

◎この報告について、各委員からの発言はなし